

Teacher's Misunderstanding in Education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/8550

教授 錯 覚

Teacher's Misunderstanding in Education

金沢大学医学部脳神経外科
山下 純 宏

教育とは学生に対して「専門的知識を教える」ことであると、単純に考えていた自分にとって、3年前にたまたま出席した、文部省・厚生省共催の「第18回医学教育者のためのワークショップ」は、教育に関して考え直す良い機会となった。12月の初旬に、全国の医学部や病院から集まった、色々な専門分野をもつ、40名の参加者が富士山麓の研修所に6日間にわたり缶詰にされて、「医学教育」について徹底的な特訓を受けることになった。例年このワークショップへは、参加希望者が多いので、今までにまだ参加していない施設からの希望者が優先されるとのことであった。ちなみに私は金沢大学医学部からの初めての参加者であった。

まず、「教育とは学習者の行動に価値ある変化をもたらすプロセスである」という言葉は、私には極めて新鮮であった。教官が教えたことを、学生がすべてよく理解し得たと勘違いすることを、「教授錯覚」と呼ぶことも初めて知った。教育においては、教官が「教えた」ことよりも、学生が「学び」そして「得た」ことが重要なのである。そして、医学教育の目標は、「医師として必要な基本的な知識と技術と態度を習得させること」にあり、態度の習得が知識と技術の習得に劣らず重要であることが強調された。

第1日目の夜に、アイスブレイキング、ブレインストーミング、文殊カードの効用を体験させられた。40名を6つのグループに分けて、まず「古新聞の利用法をできるだけ多く列挙せよ」というテーマが与えられた。ブレインストーミングによって、限られた時間内にその場でみなが見つけた古新聞の利用法は全部で何と70を越えたのである。次のテーマは「やる気をおこさせるにはどうすればよいか」であった。これに対しても、実効性はともかくとして、「ほめる」、「じっくり聞く」、「報酬を与える」など、たちまちのうちに30以上の具体的対策のための項目が挙げられた。

その後5日間にわたって、6-7名ずつのグループに分かれて、「カリキュラム作成法」、「教授・学習目標」、「教授・学習方法」、「教育評価」などについて、タスクフォースと呼ばれるコーチ陣の助言を受けながら、昼夜を問わず、討論、宿題、レポート作成、発表といった作業に追われることになった。

今、日本の多くの大学で教養部が廃止され、医学部で

は6年一貫教育が行われようとしている。新しい6年一貫教育において、カリキュラムはいかにあるべきか、当医学部でも教務委員会などにおいて盛んに論議されているところである。あえて、私見を述べさせて頂くならば、限られた6年間で、激増する情報量に対処するには、講座制の枠に囚われない、無駄のない臓器別教育を指向せざるを得ないように思われる。「学生が、何のためにどんなことができるようになっていくか」ということを最重視して、一般教育目標 GIO (General Instructional Objectives) と行動目標 SBO (Specific Behavioral Objectives) を規定したカリキュラムを作るべきである。カリキュラムは硬直したものではなく、5年間に一度位はそれぞれの GIO の相対的重要性を見直して、新しい分野の教育のために既得の分担時間の10%を抛出するくらいの気持が必要である。たとえば、分子生物学、遺伝学、免疫学、ウィルス学、医療倫理学、終末期医療、在宅医療、プライマリケアなどは、現在のシステムでは、色んな教科で必要以上に繰返し教育されている可能性があるし、また逆に「どこかで教育されているはず」と勘違いされ、実は一度も教育されていない可能性もある。このような問題も、それに対応する GIO さえしっかりと設定され公表されておれば比較的簡単に解決できるはずである。それぞれの GIO の担当教官はその分野の専門家であれば、どの講座に所属していても構わないのである。

新しい医学教育を行うに際しての最大の問題点は、教官定員数の絶対的な不足である。医学部臨床部門では、教育、研究、診療の3本柱が教官に課せられた任務である。国家公務員として同じ給与体系に載っていないながら、他学部の教官と大きく異なる点である。現状では教官がいくら教育に時間とエネルギーを割いたとしても、それが正当に評価されにくい。教官の教育努力を評価するような何らかのシステムの導入が必要であるように思われる。

ただし、注意せねばならないのは、教官がいくら「教育努力」をしたとしても、学生の側がそれに甘えて自主性を失ってしまえば、教官が「教育努力」をしたという、別の意味での「教授錯覚」に陥っているに過ぎないことになってしまう恐れがあることである。